

神の子の福音の初め

加藤 享

[聖書]マルコによる福音書 1章1～11節

神の子イエス・キリストの福音の初め。

預言者イザヤの書にこう書いてある。「見よ、わたしはあなたより先に使者を遣わし、あなたの道を準備させよう。荒れ野で叫ぶ者の声がする。『主の道を整え、その道筋をまっすぐにせよ。』」

そのとおり、洗礼者ヨハネが荒れ野に現れて、罪の赦しを得させるために悔い改めの洗礼を宣べ伝えた。ユダヤの全地方とエルサレムの住民は皆、ヨハネのもとに来て、罪を告白し、ヨルダン川で彼から洗礼を受けた。ヨハネはらくだの毛衣を着、腰に革の帯を締め、いなごと野蜜を食べていた。彼はこう宣べ伝えた。「わたしよりも優れた方が、後から来られる。わたしは、かがんでその方の履物のひもを解く値打ちもない。わたしは水であなたたちに洗礼を授けたが、その方は聖霊で洗礼をお授けになる。」

そのころ、イエスはガリラヤのナザレから来て、ヨルダン川でヨハネから洗礼を受けられた。水の中から上がるとすぐ、天が裂けて“霊”が鳩のように御自分に降って来るのを、御覧になった。すると、「あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者」という声が、天から聞こえた。

[序] 新しいスタート

新しい1年の歩みが始まりました。私にとりましては、この3月末をもって56年にわたる牧師生活に終止符をうち、一教会員となって新しい歩みを始める、大きな変化を迎える年です。牧師館もどうやら片付きました。牧師館の今後については、一切教会にお任せいたします。「主よ、私は4月以降、どの様にあなたにお仕えしていくべきでしょうか。お示し下さい。」と祈り始めて居ります。これは、私たち夫婦の健康状態にも左右されます。皆さんお一人お一人も、一年の計をお持ちでしょう。祝福豊かな年となりますように、お祈りいたします。

さて教会学校分級では、4月1日のイースターまでの3ヶ月、マルコ福音書を学びますね。マルコ福音書は、イエス・キリストの生涯、教え、活動を通して明らかにされた「福音」を記す四つの福音書の中で、一番最初に書かれた文書です。イエスキリストの十字架と復活が紀元30年頃で、それから約40年後の紀元70年頃までに書かれたと言われていています。

ちなみに新約聖書の中で一番古い文書はテサロニケの信徒への手紙一と二で、紀元50年から52年頃、次にコリントの信徒への手紙一と二で、53年から55年頃、次いでガラテヤ、ローマ、フィリピ、フィレモンが61年頃までに書かれ、それから8～9年後にマルコ福音書。マタイとルカ福音書は80年から85年頃、ヨハネ福音書は紀元100年前後に書かれました。

[1] マルコ福音書の記述についての疑問

さて一番最初に書かれたマルコ福音書の書き出しは「神の子イエス・キリストの福音の初め。」です。福音とは「良い知らせ」です。神の子イエス・キリストの福音は、私たちの人生を変える力を持っています。その例の一つとして、一人の兄弟の証をご紹介します。

「私は全盲で、妻ともう成人した二人の息子がいます。私は生後3ヶ月に失明しました。私が全盲になっ

たことで、周りの人から**前世の因縁**とか、**先祖の祟り**とか**何かの罰が当たった**などと言われ、とても恥ずかしく思い、投げやりで無気力な生活を送って居ました。しかし**19才**の時、友人に誘われて**教会**に行くと、**牧師**から『私たちの人生は**神さまから与えられた**ものです。失明の原因は、**因縁**とか**罰**とか**祟り**ではありません。神さまから与えられた人生ですから、**必ず神さまが守って下さいます**。あなた自身が今は受け入れられなくても、**神さまを信じて、生きていきましょう**』と励まされました。それがとても嬉しかったので、教会に通い始めてクリスチャンになりました。私の人生は**180度変わり**、すべてのことを前向きに考え、対処できるようになりました。良い家庭も与えられました。**永遠の命**に向かって、日々を過ごしています。」

このように一人の人の人生を一変させる**神の子イエス・キリストの福音**は、どのように始まったか。旧約聖書に既に記されてあるように、救い主到来の先触れ役、**洗礼者ヨハネ**が登場することによって始まったと、マルコは書き始めました。洗礼者ヨハネは、荒れ野で暮して神と交わり、罪の赦しを得させるために、**悔い改めのバプテスマ**を宣べ伝え始めました。するとユダヤの全地方とエルサレムの住民が、ヨハネの許に集って来て、**罪を告白**し、ヨルダン川で彼からバプテスマを受けました。

ヨハネはバプテスマを授けながら、こう宣べ伝えました。「わたしよりも**優れた方が**、後から来られる。わたしは、かがんでその方の履物のひもを解く値打ちもない」履物のひもを解くのは奴隷の仕事です。ですから後から登場される**真打**の前では、自分は奴隷にも値しない者なのだ。どうしてかというと、「わたしは**水**であなたたちにバプテスマを授けたが、その方は**聖霊**でバプテスマを お授けになるからだ」というのです。

そこへ**主イエス**がガリラヤのナザレからやってきて、ヨハネからヨルダン川でバプテスマをお受けになりました。全身を水に沈めて、水の中から上がられるとすぐに、天が裂けて**聖霊**が鳩のように降って来ると同時に、「あなたはわたしの**愛する子**、わたしの心に**適う者**」という声が、天から聞こえたのでした。

ここで**おや**と思うことが二点あります。**第一**はヨハネが「自分はそのお方の奴隷にも値しない」と言っているながら、どうして**そのお方**にバプテスマを授けたのかという点です。おかしいですね。そこでマルコ福音書を参考にしながら書かれた**マタイ福音書**では、ヨハネが主イエスを見ると、「わたしこそあなたからバプテスマを受けるべきなのに」(3:13~14)と言って、主イエスを**思いとどめよう**としたと書いています。その方が当然でしょう。ところがマルコ福音書は、ヨハネの**ためらい**には一切ふれずに、簡潔に「**バプテスマを受けられた**」とだけ記しています。

第二のおかしな点は、ヨハネの授けていたバプテスマは、罪の赦しをいただくための**悔い改めのバプテスマ**です。イエス・キリストが罪を悔い改める必要があったとでも言うのでしょうか。いいえ、マルコはこの福音書の冒頭で「**神の子イエス・キリストの福音の初め**」とはっきり書いています。**神さま**は罪穢れの一切ない**聖なるお方**です。ですから神の子**イエス・キリスト**も罪穢れをもつ私たち人間とは質を異にする**聖なるお方**です。悔い改めて罪の赦しを得る必要などないお方です。ではどうしてヨハネからバプテスマをお受けになったのでしょうか。

[2] ヨハネとイエスの生い立ち

この二つに疑問に取り組む前に、ヨハネとイエスの**生い立ち**について、簡単に述べることにいたします。ヨハネは**祭司ザカリア**の子です。老年になって子を得る望もなくなったこの夫婦に、**聖霊**によって特別に与

えられ息子です。恐らく、祭司としての教育を受けながら成長したことでしょう。しかし彼はやがて家を出て、荒野でらくだの毛衣を着、いなごと野蜜を食べて厳しい修業を積み、旧約聖書に預言されていた、**荒野に救い主の道を備える預言者**として、召されたのでした。

一方主イエスは、ナザレの村大工ヨセフと婚約中の乙女マリアが、**聖霊**によって身ごもった子です。ヨセフも天使のお告げを信じて、マリアとイエスを受け容れました。ヨハネとイエスは、二人とも**聖霊の特別な働き**で誕生した点で、共通しています。しかし主イエスは、皇帝の命令で住民登録をするためヨセフが身重になったマリアを連れて、出身地ベツレヘムに出向いている時に誕生しました。宿屋が満員なので、**家畜小屋**での出産でした。しかし飼料桶に寝かされた乳飲み子でしたから、野宿して羊の番をしていた**貧しい羊飼**たちが、真先にお祝いすることができました。この**救い主の貧しい誕生の意義**については、クリスマス礼拝で一緒に学びました。

一方異常に光る星のお告げで、**新しい王の誕生**を東の国から祝いに来た学者たちの知らせで、不安に襲われた**ヘロデ王**は、ガリラヤ一帯の幼子を皆殺しにしました。しかしいち早くエジプトに避難したヨセフ一家は、王が死ぬと、ユダヤに戻り、ガリラヤのナザレに住み着きました。主イエスも父の後を継ぎ、大工をしながら、母や兄弟たちを養っていました。そしてバプテスマのヨハネの話を聞いて、**信仰深いイエス**も、ヨルダン川のヨハネの許にやって来たのでした。その時、主イエスは**30才**になっていました。(ルカ3:33)

[3] 救い主キリストとしての召命

さて、本題に戻ります。第一の疑問。どうしてヨハネは**何のためらいもなく**イエスにバプテスマを授けたのでしょうか。私はこう思います。主イエス自身が、天が裂けて、霊が鳩のようにご自分に降って来るのを見て、更に「**あなたはわたしの愛する子、わたしの心に適う者**」という声を聞いたのは、**バプテスマを受けた後**のことでした。

この天からの言葉は、王の即位式での任命の歌「お前はわたしの子、今日わたしはお前を生んだ」(詩編2:7)にもとづく言葉です。そしてその時に主は**メシア(救い主)**としての**召命**を明確に自覚されたのでした。天が裂けて霊が鳩のようにご自分に降って来て、**み言葉を聞いた**——これは主イエスが**お一人で聞き取った召命体験**ですね。たとえヨハネが傍に居たとしても、気付かなくて当然です。何故なら神の御業に召し出されるという**召命**は、本人の**深い霊的体験**だからです。私も牧師への召しを、私一人の祈りの中で受け取り、よく祈ってから牧師に申し出ました。

ですから、母を始め兄弟たちを養って暮しているナザレ村の30才の大工イエスが、他の人々と共にヨハネの許にやって来て、自分の罪を告白し、悔い改めのバプテスマを受けたと考えても、筋が通ります。またヨハネ自身も同様に、来るべきメシアと気付かないまま、主イエスにバプテスマを授けたのではないのでしょうか。

[4] キリストと結ばれるバプテスマ

第二のおかしな点は、ヨハネが授けていたバプテスマは、**罪の赦しをいただくための悔い改めのバプテスマ**です。イエス・キリストが罪を悔い改める必要があったとでも言うのでしょうか。いいえ、マルコはこの福音書の冒頭で「**神の子イエス・キリストの福音の初め**」とはっきり書いています。**神さまは罪穢れの一切ない**

聖なるお方です。ですから神の子イエス・キリストも、罪穢れをもつ私たち人間とは質を異にする聖なるお方です。悔い改めて罪の赦しを得る必要などないお方です。ではどうしてヨハネからバプテスマをお受けになったのでしょうか。

ここで私たちは、貧しい羊飼いたちが天使から聞き取った救い主のしるしを思い起こします。「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。あなたがたは、布にくるまって飼葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである。」卑しい最下層の羊飼いで取り囲んで、喜び祝うことが出来る飼葉桶に安らかに身を置いてくださるキリストの誕生です。飼葉桶のような卑しい心にも安らかに身を置いて下さる救い主。ですから、ナザレのイエスとなられた救い主は、ヨハネのもとに来て、罪を告白してバプテスマを受ける人々とも一緒になってバプテスマを受けられたのではないのでしょうか。

パウロはこう語っています。「あなたがたは皆、信仰によりキリスト・イエスに結ばれた神の子なのです。バプテスマを受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ている者だからです」(ガラテヤ3:28)。バプテスマを受けてキリストに結ばれる——そうです。私たちはバプテスマを受けることによって、神の御子でありながら私たちと同じ様にバプテスマを受けて下さったイエス・キリストと結ばれて、神の子とされているのです。キリストを着ている者、すなわちキリストに全身を覆われるので、神の子と呼ばれる者になるのです。

[結] バプテスマと主の晩餐式の恵み

罪を悔い改める必要のない神の子イエス・キリストが、バプテスマを受けて下さいました。私たちと結びついて、私たちを覆い、神の子にして下さるためにです。どうかバプテスマをお受け下さい。他の人への配慮を後回しにして、先ず自分を大事に生きようとしてしまう罪を悔い改めて、その罪から自由に解放されるために、バプテスマを受けてキリストに結びつくようではありませんか。

そして主の晩餐式にあずかり、「主よ、貴方のように与える愛を増し加えて下さい。」と祈りつつ、キリストのお身体を表すパンと杯をいただくではありませんか。神の子イエス・キリストは、神であることを固執せず、自分を無にして私たちと同じ低く卑しい者になって、私たちと結ばれ、共に生きて、私たちを神の子に引き上げて下さる救い主なのです。何と嬉しいことでしょうか。ですから、イエス・キリストの救いを福音と言うのです。

祈ります：ナザレのイエスとなって、家畜小屋の中で誕生し、私たち庶民の間で生涯を送り、私たちの一切の罪を引き受けて十字架に付き、罪を贖う死を遂げ、墓より復活して死をも滅ぼし、永遠の命を示しつつ、天に戻って行かれた救い主イエス・キリストの救いの恵みを、感謝いたします。そのイエスさまが、聖霊となって、今も私たち一人一人と共に生きて下さっていますことを、感謝いたします。どうぞ私たち一人一人も、あなたの愛を頂き続けて、互いに愛し合って生きる者にして下さい。今日もこのように礼拝出来たことを感謝します。大切な命を殺す心を取り除いて下さい。平和をお与え下さい。救い主イエス・キリストの御名によって、お祈りいたします。 アーメン